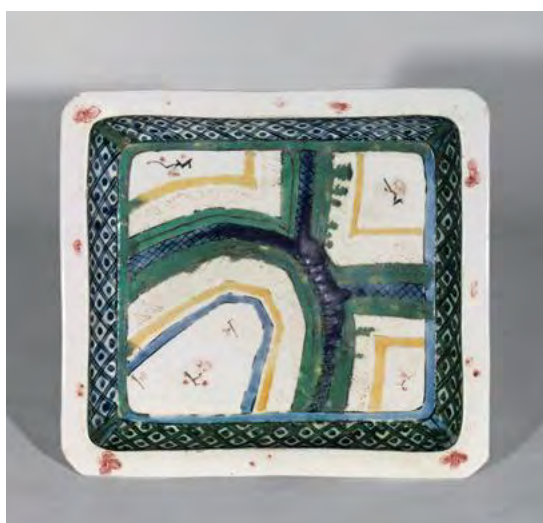


東京国立近代美術館工芸館名品展 漆・木・竹工芸のみかた

特別陳列 古九谷と加賀蒔絵の至宝—百万石大名の自負—



重要美術品《色絵畦道図角皿 古九谷》個人蔵
—「古九谷と加賀蒔絵の至宝」より—



田口善国《日蝕蒔絵飾箱》東京国立近代美術館蔵
—「漆・木・竹工芸のみかた」より—

■ 特別陳列 加賀藩の美術工芸Ⅱ【前田育徳会尊經閣文庫分館】

■ 古い物語【近現代絵画・彫刻】

■ 優品選【近現代工芸】

- 企画展Topics いしかわのおもてなし
- 12月の企画展示室
- 展覧会回顧 美術館創設60年のあゆみ
- 12月の行事予定
- アラカルト ただいま展示中

第5展示室

東京国立近代美術館工芸館名品展 漆・木・竹工芸のみかた

主催：「東京国立近代美術館工芸館名品展」等実行委員会、石川県、金沢市、東京国立近代美術館
後援：文化庁、北國新聞社

11月22日(金)～12月22日(日) 会期中無休



佐治賢使《都会》



栗本夏樹《秀吉の陣羽織》



藤沼昇《根曲竹花籃 春潮》



池田巖《黒金入花入》

以上はすべて東京国立近代美術館蔵

東京国立近代美術館工芸館は、二〇二〇年を目標に、石川県金沢市へ移転します。それに先駆け、工芸館がこれまで収集してきた近現代の工芸作品から、本年度は、漆工・木工・竹工分野の作品をご紹介します。

工芸分野で、「素材」や「技法」は、大切な造形要素です。作品を前にすると、それらをよく見ようと、視線は全体から細部へ集中していきます。すると、一見ただけでは分からない小さな工夫に気づくことがあります。しかし、細部だけでなく作品全体を見ることも重要です。作品から受ける印象は、部分的な要素がどのように構成されているかという点とも結びついているからです。

そこで今回は、①近づいてみる・②遠ざかってみる・③他の作品と比べてみるという3つのステップで鑑賞してみてください。これまで隠れていた、作品の新たな魅力を、発見していただけるのではないのでしょうか。

◆ギャラリートーク

日時／十一月二十二日(金) 十時～十一時

担当・唐澤昌宏氏(東京国立近代美術館工芸課長)

十二月二十二日(日) 十一時～十二時

担当・成田 暢氏(東京国立近代美術館工芸課特定研究員)

申込不要・要観覧券

〔東京国立近代美術館工芸館移転連携事業・関連行事〕

◆O才からのファミリー鑑賞会

日時／十二月七日(土) 十四時～ 八日(日) 十時～

会場／石川県立美術館

※詳細は七頁をご覧ください。

◆企画展「絵付けの魅力」

会期／十一月一日(金)～十二月十五日(日)

会場／石川県九谷焼美術館

◆「人間国宝を中心に・陶磁器の美と技」

会期／十二月十四日(土)～二月十一日(火・祝)

会場／石川県七尾美術館

◆特別展「京都の工芸 近代から現代まで」

京都国立近代美術館所蔵品を中心に

会期／十一月一日(金)～十二月十五日(日)

会場／金沢市立中村記念美術館

◆「入館料割引について」

十一月二十二日(金)～十二月十五日(日)の期間中、次の対象施設

では、他の対象施設の観覧券の半券を提示すると、鑑賞当日のみ観

覧料が割引になります。

対象施設・石川県立美術館・石川県立歴史博物館・石川県立伝統

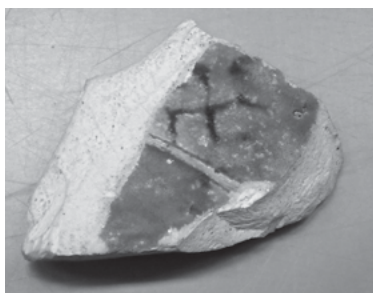
産業工芸館・金沢市立中村記念美術館

特別陳列 古九谷と加賀蒔絵の至宝 一百万石大名の自負一

11月22日(金)~12月22日(日) 会期中無休

学芸員の眼

本展には、九谷古窯跡から発掘された白磁鉢と、九谷A遺跡から発掘された色絵陶磁片も展示されます。ここで注意しなければならないのは、発掘された資料は、いずれもゴミとして捨てられたものであるという現実です。したがって、九谷古窯で生産され、捨てられなかったものは、これ以上の技術的・美的完成度を持ったものだったということ、当館が所蔵する古九谷の優品も当然その中に含まれます。今回展示される資料をとおして、九谷では極めて高度な色絵素地を生産する技術と、色絵、青手いづれの様式もこなす上絵付の技術があったことが確認されます。それならば、有田で発掘された色絵陶磁片をどう解釈するかについては、十二月七日の土曜講座でお話ししたいと思います。



九谷A 遺跡出土 色絵陶磁片
(財) 石川県埋蔵文化財センター蔵

本展は、国立工芸館(東京国立近代美術館工芸館) 移転に関連した「時代で巡るいしかわの工芸展」の一環として、十七世紀にスポットを当てることを趣旨に開催されます。今日、石川県が名実ともに「工芸王国」となったのは、加賀藩主・前田家の文化政策が明治時代以降発展的に継承されてきたことによりです。前田家の文化政策という点、どうしても「百万石の財力にあかせた」とのイメージが先行し、また文化に財力を投入することで、前田家は幕府の警戒心を和らげたとの解釈も根強くあるようです。

りです。したがって、前田家の文化政策は「守り」ではなく「攻め」の姿勢であり、幕府に対する主体性の積極的表明でした。「古九谷と加賀蒔絵」が、日本の工芸史の中で特筆される独自の様式を展開しているのもこうした姿勢によるものであり、特に書跡・典籍類の収集に見られるような飽くなき美の追求が、工芸のジャンルにおいても見事に結実しています。

「漆聖」とうたわれた松田権六は、人、物、自然に学ぶことを終生のモットーとしていました。その中でも優品から学ぶことについては、身も心も啓発されるほどに至ってこそ、無言の作品から雄弁きわまらない光明の教えを温かく授けられると重視していました。この松田の哲学も、加賀の文化風土が醸成したものであることを今回再認識したいと思います。



重要文化財《秋野蒔絵硯箱》五十嵐道甫 個人蔵

第3展示室

古い物語 【近現代絵画・彫刻】

11月22日(金)～12月22日(日) 会期中無休

「古い物語」と題した特集展示、それぞれの作品にまつわる「物語」を感じ取っていただくため、いくつか作品についてご紹介しましょう。

まずは日本画から伊東深水《酔燕台翁》。モデルの細野燕台は泉鏡花や徳田秋声と同年代で、北大路魯山人を世に出した人としても有名です。右手の杖は燕台の愛用で、魯山人の篆書が刻まれています。本作が描かれた最晩年は、絶縁状態にあった魯山人が泉下の人となって二年が経過しており、それでもその杖を離さず愛用した燕台の人柄が偲ばれます。作者伊東深水は毎朝三キロも歩いて、燕台の陽明学講義を聞きに通っています。

彫刻の坂坦道《かえり舟》は物語性のない作品です。埠頭にひとりカンテラを持ち、漁から帰らぬ舟を待つ老婆の心境が、鑑賞者の胸に迫ります。彼女が待

つのは長年連れ添った夫でしょうか、それとも息子でしょうか。

油彩画からは竹沢基《亡き息子を忍ぶ母親の像》を紹介します。竹沢基が生涯にわたるテーマとしたのは人物です。その多くは若い女性が椅子に腰かけたもの。あえて奇抜なポーズや意図的なシーンの設定はせず、モデルが持つ本来の魅力をひき出そうとしています。そのような竹沢の画業の中でも異彩を放つのが本作です。昭和五十三年にイラン革命を取材中に殉職した、ジャーナリストの子息を想う妻の姿を描いています。作者は描くことで自らも癒やされたと述べています。

展示作品から様々な古いの美を感じ取ってください。



竹沢基 《亡き息子を忍ぶ母親の像》

前田育徳会尊經閣文庫分館 特別陳列 加賀藩の美術工芸Ⅱ

11月22日(金)～12月22日(日) 会期中無休

今回は、『小さ刀拵』と『源氏物語(花散里)』の二点の重要文化財について紹介します。小さ刀拵とは、打刀風の短刀拵の様式であり、平常時に武士の身を護る懐刀として鎌倉時代から数多く制作されました。本作は、加賀藩二代藩主前田利常の命により、本阿弥光甫が後藤祐乗の作と伝えられる金具を惜しみなく使用して制作したものです。七所物(縁頭、小柄、筭(こうがい)、胴金目貫、栗形、折金、鯉口鑑(こじり)は、いずれも金無垢で、室町時代以来の装剣金工の名門後藤家の洗練された技術と美意識が、黒漆・研出鮫によく映えています。

続いて、先般新たに発見されて話題となった『源氏物語』です。数ある『源氏物語』の写本のうち、藤原定家が校定したものを、表紙が青表紙であることから

「青表紙本」と呼んでいます。このうち定家自身により書写されたものは「定家自筆本」とされ、全五十四帖のうち「花散里」、「行幸」、「柏木」、「早蕨」の四帖が重文に指定されています。そこにこのほど「若紫」が発見され、さらなる出現も期待されます。前田育徳会はこのうち「花散里」「柏木」の二帖を所蔵し、今回は「花散里」の一帖を展示します。

この前田育徳会所蔵の二帖とも、古くは藤原定家の自筆とされてきましたが、現在では「花散里」は定家の自筆ではなく、「柏木」も定家自筆は冒頭のほんの数行で、他は定家の子女などの筆によるとされています。二帖の表紙中央上部にはそれぞれ「花ちる」と「かしハ木」の外題が貼られており、外題の筆者は後柏原天皇(一四六四～一五二六)です。

重要文化財 《小さ刀拵》

いしかわのおもてなし —屏風絵などの調度を中心に—

令和2年1月4日(土)~2月11日(火・祝) 会期中無休

オリンピックキヤアの幕開けを、おもてなしの心を表現した展覧会で飾ります。

屏風絵や掛幅を背に調度品を配する飾りつけは、おもてなしの姿そのものといえます。風よけや部屋の間仕切りとして発達した屏風は、江戸時代になると贅を尽くした金地のきらびやかなものがさかんに用いられるようになりました。そこにしつらえられる調度とともに部屋を飾り、おもてなしの心を込めて来客を迎える場に用いられました。

天皇や将軍を迎える際に示された、加賀前田家の時代の「おもてなしの心」こそ石川美術の原点と位置づけられます。また、武家に限らず、商家でも屏風を持つことが豊かさの証しとされたため、多くの優品

がこの地に残され、客を迎えました。

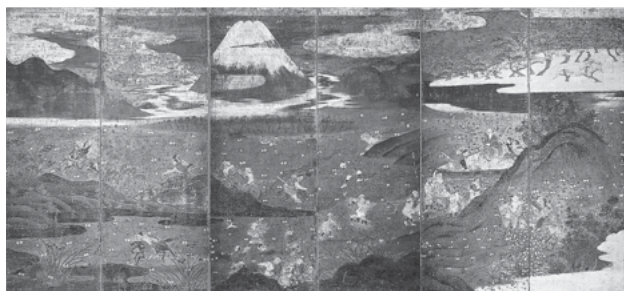
本展では室町時代にはじまり、江戸・明治と続く屏風を中心とした絵画と、工芸品を取り合わせて展示します。また大正・昭和にかけて残された近代の名品も展示し、近代の工芸品の展示と併せ国内外から石川を訪れる来客へのおもてなしの心を表現します。

ご来場をお待ちします。

◆観覧料(2階コレクション展示観覧料を含む)

一 般…八〇〇(六〇〇)円
大学生…六〇〇(五〇〇)円 高校生以下…無料

※(一)内は二十名以上の団体料金



《富士巻狩図屏風》

優品選 【近現代工芸】

11月22日(金)~12月22日(日) 会期中無休

今回、第6展示室で近現代工芸部門の展示を行います。

陶芸は初代から三代までの徳田八十吉、吉田美統、武腰潤といった、主に日本伝統工芸展で活躍する作家、大樋陶治斎(十代大樋長左衛門)や武腰敏昭、二代浅藏五十吉、北出塔次郎などの日展出品作家たちの代表作に加えて、明治時代に一世を風靡した、九谷庄三の大作《色絵金彩八仙人花鳥図大花瓶》を展示し、近代から現代の名工のわざをご覧いただきます。

金工は、明治時代に鉄の板をたたいて成形する技術が高く評価された、山田宗美の大作、石川県指定文化財の《鉄打出狛犬大置物》をはじめ、金森映井智の象嵌花瓶、金岡宗幸の銅水指、三代魚住為楽の砂張水指など、さまざまな技術を見ることが出来ます。

漆芸では二人の蒔絵の人間国宝、大場松魚と寺井

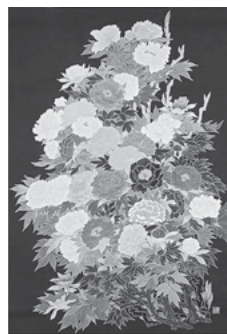
直次、日展を中心に活躍した佐治賢使、小松芳光らの作品から、漆芸というジャンルにおける多彩な表現を紹介します。

染織作家の作品は、友禅の人間国宝・二塚長生、小紋染めの坂口幸市の着物と、同じく友禅の人間国宝・木村雨山の染絵の大作《牡丹》を展示します。

また工芸と茶道のかかわりを示す展示として、裏千家淡々斎好みの水見晃堂作《桑造櫛形風炉先》に、銅鑼の人間国宝・初代魚住為楽による竹茶杓、蒔絵の人間国宝・松田権六作品の髹漆を請け負っていた奥出寿泉の《乾漆菊形茶入》を取り合わせます。

展示室入口近くのケースには、石川県加賀市出身で、^{きりかね}截金の人間国宝であった、西出大三の作品を三点展示します。

北陸ゆかりの名工たちの作品をお楽しみください。



木村雨山《牡丹》

第7・8・9展示室

第31回 志賀町を描く美術展金沢展

12月6日(金)～9日(月) 会期中無休

志賀町を描く美術展は、志賀町の四季を通じて彩りを添える風景・豊かな自然の恩恵を受けて生まれしてきた伝統文化や慣習などをキャンバスに描いていただくことにより、志賀町をより多くの皆様にPRする目的で開催しております。例年、招待作品から一般作品まで約一四〇点の洋画・日本画・水墨画・水彩画などの作品を富来展と金沢展の二会場で展示しております。

◇入場無料

◇連絡先／志賀町生涯学習センター

羽咋郡志賀町高浜町カリー

電話：〇七六七―三二―二九七〇

第8・9展示室

第29回独立DO展

11月29日(金)～12月2日(月) 会期中無休

石川独立は、昭和五十四年に県内在住の独立展出品者を中心にDO展として発足しました。日本のフォービズム(野獣派)の流れを汲む独立展は、東京国立新美術館で毎年開催されており、今年で八十六回を数えます。自由で個性強烈な作家を輩出している事で注目を集めています。

三十日には批評会も行い、作家それぞれの作品に対する思いが理解できる機会ともなっていますので、是非ご参加ください。

◇出品予定作家

大部雅子・桑野幾子・進地美穂・田井淳・南雲まき

西又浩二・堀一浩・堀田正人・伊藤裕貴・乙部久子

桜井節子・舟橋清・松村裕之

◇入場無料

◇連絡先／堀一浩 電話：〇九〇―四三二六―五八四九

丹羽俊夫会長が石川県を基盤として創立し、今年四十三回展を迎えます。

理事長三宅厚史、副理事長今村文男をはじめ、県内外からの出品を中心に日本画百点余を展観。また「国際公募新院展」に出品された秀作も多数展示致します。

◇主な出品者

松尾功一朗・伊藤夏子・中村勝代・大窪昭子

牛丸美代子・北川真理子・北出朝之・保科誠

柴田輝枝・村中博文・南好乃

◇入場無料

◇連絡先／丹羽俊夫 金沢市窪一―二二三

一般社団法人二科会写真部石川支部主催の公募展は、今年も県内の一般写真愛好家各位の応募を多数頂き、今回で三十四回を迎えました。公募展の第一次審査では公開審査で入選候補作品を選定し、全候補が揃ったところで正式に入選を決めます。さらに二次審査では、東京から専門誌フォトコン編集長を審査員に迎え、支部対象等入選作品を選びます。公募展はこれらの作品と今年の二科本展入選作品、石川支部無鑑査出品、二科会友出品、審査員二科会会員出品等、およそ百点の写真展です。皆様にご高覧に頂き、ご指導ご鞭撻を賜りますようご案内申し上げます。

◇入場料／無料

◇連絡先／一般社団法人二科会写真部石川支部

支部長・吉田淑子

電話：〇七六一―二二一―〇八三三

第8・9展示室

第43回 公募日創展&新院展選抜金沢展

12月14日(土)・15日(日) 会期中無休

第7展示室

第34回 二科会写真部石川支部公募展

11月29日(金)～12月3日(火) 会期中無休

企画展「美術館創設60年のあゆみ 石川の美術」

会期：8月31日(土)～10月7日(月)

「美術館創設六十年のあゆみ」は、昭和三十四年の石川県美術館(旧館)の開館から六十周年を記念した展覧会でした。ここまで所蔵品がどのように収蔵され、今日の三九一九点となっていたかをご紹介します。展覧会の回顧とします。

金沢出身の建築家谷口吉郎氏の設計になる旧館は、公立館としては神奈川・東京に次ぐ歴史を誇る美術館でした。開館に先立ち山川庄太郎氏の国宝《色絵雉香炉》をはじめ、重要文化財の《色絵梅花図平水指》、《西湖図》など今日の所蔵品の核となる作品が寄附されました。これらが開館当初の所蔵品で、次いで当時石川県が所蔵していた美術品が保管換えによって所蔵品となりました。その中には、古九谷《色絵鳳凰図平鉢》、久隅守景の《四季耕作図》、板谷波山の《葆光彩磁チューリップ文花瓶》などが含まれます。三十八年に始まる日本伝統工芸展金沢展の開催は、現代の工芸作品に目を向ける転機となり、石川県工芸作家選抜美術展、伝統九谷焼工芸展、伝統加賀友禅工芸展における優秀作品の買上などもあつて工芸作品が充実していきました。

五十年代は全国的に美術館建設のブームに沸いた時代でした。石川県でも新美術館建設が求められ、工芸だけでなく、絵画・彫刻の作家からも支援を得て、開館への気運が高まってきました。ここに近現代の日本画・油彩画・彫刻の収集が始まりました。

五十八年の新館開館直前には、建設に大きな力添えをいただいた洋画家・高光一也氏から自作百点の大量寄附があり、これに続いて地元作家から多くの寄附が寄せられました。

当館の設立趣旨に賛同して作品を寄附して下さるなど、所蔵品の充実に協力いただいた方々の力により今日の石川県立美術館があります。今回の展覧会開催にあたり、あらためて感謝申し上げます。

12月の行事予定

■土曜講座	13時30分～15時	美術館講義室	無料
7日(土)	「古九谷と加賀時絵」	担当課長	村瀬博春
14日(土)	「展示を楽しむ鑑賞法あれこれ(実践編)」	担当課長	深山千尋

0才からのファミリー鑑賞会

今年も工芸作品を鑑賞する「0才からのファミリー鑑賞会」を開催します。

「赤ちゃんが美術作品を鑑賞？」と思われるかもしれませんが、赤ちゃんたちもそれぞれ、作品への好みがはっきりしており、興味を持つ作品への態度は明らかに違います。自分の気になる作品を前にすると、じっと見たり、足や手をバタバタさせたり、指さしたり。その年齢らしい、またお子さんそれぞれの「好き」を身体表現で教えてくれます。

いろいろな美術館で乳幼児の鑑賞会をサポートしている、赤ちゃんからのアートフレンドシップ協会・代表理事の富田めぐみ氏を交え、安心して小さなお子さんと美術館で作品を楽しむ方法をご案内します。これを機に、親子やご家族で美術館デビューしてみませんか？

◆0才からのファミリー鑑賞会

日時／①十二月七日(土)十四時～ ②十二月八日(日)十時～

講師／富田めぐみ氏(赤ちゃんからのアートフレンドシップ協会・代表理事)

対象／0才から小学生のお子さんとその保護者

定員／各回三十名

申込／美術館普及課まで電話で申込・先着順

電話：〇七六一三三二一七五八〇

石川県指定文化財《色絵鶴かるた文平鉢 古九谷》いろえつるかるたもんひらばち こくたに
口径42.9cm×底径18.5cm×高9.5cm 江戸17世紀



古九谷の意匠はしばしば大胆・斬新、あるいは異国趣味と形容されますが、そこから『ダ・ヴィンチ・コード』のように何らかの意味を読み解くというアプローチも面白いかも知れません。本作は、克明な細線によって構成した緑の方形を地文とし、白抜き技法を活用して八羽の鶴とスペード文をそれぞれ四十五度ずらして十字形に配置しています。各々のスペード文の中には九個のハート形が配置されていますが、単に西洋の文物を意匠に取り入れたという次元ではなく、厳密かつ合理的な意匠構成に西洋文化への深い洞察が認められます。

鶴は洋の東西を問わず長寿を象徴することを前提として、スペードの中のハートがなぜ九個なのか考えてみましょう。九は西洋文化において自身を生み出す数とされています。二×九＝十八から一十八＝九×二から九に掛けて一の位と十の位を足すとすべて九になることが、その理由とされています。そして鶴の数の八も一週間の七日が終わり、八日目から新たな週が始まることや、アラビア数字の8に始めと終わりがなく、裏面には、色絵で復活・再生を象徴する蝶を意匠化したような華麗な花唐草文が切れ目なく描かれており、こちらも永遠性を表すものと解釈することができます。

このように、本作の意匠構成には興味深い関連性があります。明らかに+と×を意識した意匠の配列からも、本作が提示している生命の永遠性が表象する方向が見えてきます。

次回の展覧会

令和2年1月4日(土)
～2月11日(火・祝)
会期中無休

前田育徳会 尊経閣文庫分館		第2展示室	
新春優品選		新春優品選	
第3・4展示室	第5展示室	第6展示室	1F企画展示室
平成回顧 【近現代絵画・彫刻】	新春優品選 【近現代工芸】	墨の美 【近現代書】	いしかわの おもてなし

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)

大学生 290円(230円)

高校生以下 無料

※()内は団体料金

12月2日は第1月曜日より

コレクション展示室無料の日

12月の開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後7:00 年中無休

12月の休館日は
23日(月)～31日(火)

「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか？

石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、
県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ

郵送配布!! 3,000部発行

ターゲットを狙った
知名度向上

県立美術館発行の
信頼度の高い広報媒体

お問い合わせ ☎092-716-1401

株式会社ホープ 福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場 財源確保 検索

石川県立美術館だより
第434号(毎月発行)
2019年12月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL <http://www.ishibipref.ishikawa.jp/>

石川県立美術館は電源立地地域対策
交付金を活用して運営しています。